

Newsletter

AUG. 1996

梅里雪山に 再挑戦に 当たって

総隊長 斎藤惇生

日中合同梅里雪山学術登山隊の議定書調印団が、八月三日来日、七日に北京での会談、三月に北京、昆明での会談と備忘録の調印が行われたのだが、今回の議定書の調印でいよいよ登山隊は本格的に準備行動を開始する。

一九九一年の一月三日遭難が発生してから六年目にして、日中十七名の隊員たちの志をついで、梅里雪山の登山が実現することになった。このことを会員の皆様に報告できるのは大きな喜びである。

一九九四年四月下旬から五月上旬にかけて現地徳欽を訪問された梅里家族団に、AACCKより倉智清司が

秘書長、私が医師として随行した。徳欽では飛來寺の北にメコン河をはさんで、梅里雪山の東面を一望できる丘がある。ここで西藏の旅人は聖山梅里雪山に向かって香を炊き、経を唱え、旅の安全を祈る。ここに遭難慰霊の碑が建立されている。

遺族の皆さんとここに三回通った。しかし天候は悪くないのに梅里雪山は雲に覆われていつも姿を現さなかった。徳欽を離れる朝、予定外であったが、もう一度行ってみたら、なんと梅里雪山は秀麗な神々しい全容を見せていたのである。遭難現場の第二バットレスからC3の位置もはつきりと手に取るように見ることができた。遺族の皆さんと手を取り合っただけで感動したのであった。隊員たち一人一人の顔が頂上稜線の上に見れては消えたように思えた。私はこのとき以来、梅里雪山はAACCKと中国の合同で再び登るべきだとの思いを抱き続けた。

幸いそのころより中堅、若手の間に再挑戦の機運があり、松林公蔵、人見五郎を中心に過去の記録の研究をし、新しい登攀計画が練られ、今回の実現になったのである。

湿润ヒマラヤのなかでも梅里雪山

は長江、メコン、サルウィン河が近接並流する三江地帯にあつて気象の変化は激しい。しかし冬期は降水量も少なく、比較的安定している。梅里雪山の一周巡礼は十一月が最も多いと聞いている。これは十一月が最も安定していることを意味している。

今回の登山の成否は ①気象の変化を早くキャッチして対処すること ②スピーディーな登攀 ③日中合同の円滑な運営 ④地元西藏族住民の宗教、文化、習俗の尊重と良好な関係 ⑤そしてすばらしいチームワークにある。

気象係として福崎賢治が専任する。現地ではノア気象衛星の画像解析、日本からはひまわりの画像解析の予報が気象協会の森本陸世のチームから送られるので心強い。

後援は読売新聞で、現地からインマルサットを使ってニュースは即日日本に到達する。

未踏峰もほとんどに残り少なくなつた。梅里雪山は、登山界で二十世紀最後の最も大きいパイオニアワークになるだろう。AACCKらしい登山が展開されることを隊員たちに期待している。

梅里雪山計画

その後の経緯

「日中友好梅里雪山合同学術登山隊」(正式名)は、多くの困難を乗り越えてようやく調印の運びになった。前回に引き続きこれまでの経過を報告する。

一、隊の構成

日本側登山隊隊員は、全会員から希望者を公募した。五月十五日に隊員応募をしめきり、十九日に隊員を決定した。決定した隊員は次の通りである。(括弧内は主な海外登山経験)

- 総隊長 斎藤惇生 (66) (新河端病院院長)
(62) サルトロカシ、(73) ヤルンカン、(79)、(80) チョモランマ、(84) ナムナニ、(88) チョモランマ、(90) シシャパンマ、(92) ナムチャバルワ
総括隊長兼医師 松林公蔵 (45) (高知医科大学講師) (82) カンペンチン、(84) ナムナニ、(85) マサコン、(90) シシャパンマ
秘書長 倉智清司 (48) (アオヤギ(株)取締役営業部長) (85) グラタンドン、(88)、(89) メイリ
登攀隊長 人見五郎 (40) (九州国際大学助教授) (82) カンペンチン、(85) マサコン、(88) コンロン、(91) メイリ
気象担当 福崎賢治 (45) (鹿児島短期大学講師) (85) マサコン、(90) シシャパンマ

装備係 吉村千春 (37) (アナバン代表取締役)
(コルジュネフスカヤ、コンゲール、ポベータ、四姑娘南壁など)

同 中山茂樹 (34) (蝶理(株))

(85) マサコン、(89) ムスターグアタ、(90) シシャパンマ、(89) メイリ

食糧、輸送高井正成 (34) (京大霊長類研究所助手)

(85) マサコン、(89) ムスターグアタ、(90) シシャパンマ

事務 睦好正治 (30) (立命館大学)

(88) コンロン、(95) バツラ・イシユクイク氷河) 食糧 小林尚礼 (28) (株) 日本水)

(95) カラコルムトレッキング)

装備、事務中村 真 (28) (京大大学院生)

(91)、(94) マッキンリー) 以上 十一名
報道 (読売新聞) 四名 以上日本側 十五名
中国側総隊長

葉明寿 (55) (雲南省体育運動委員会副主任) 隊員 四名 (未定) 以上中国側 五名

シエルバ 四名 合計 二十四名

なお、新井浩 (昭和三十二年法卒) がボランティアとして事務局長をつとめてくれる。

二、議定書調印団来日まで
備忘録仮調印はすんだが、議定書の本調印は中国側が来日して行われることになっていた。しかし五月の末に来る予定の調印団が、「徳欽県の都合により」来日延期となり、以後雲南省体育運動委員会弁公室副主任張俊氏を窓口として、電話、ファックスで交渉する日が続いた。問題は、この

山を聖山とする地元住民の感情を考慮した徳欽県の新しい県長(藏族)の考えにあつたらしいが、真相は分からない。張俊氏も懸命に徳欽県長と交渉してくれていたが、七月十一日になつても事態は好転しなかつた。

このままでは、物品の発注、隊荷の船積み発送の期限もあり、最終決断をつける必要に迫られた。

七月十三日、急遽、ヒマラヤ委員会と理事会が開かれ、事態の分析と討論が行われた。そして結局、二十日を限度として来日の返事が得られないときは、今年の登山は中止、来年以後は引き続き努力することを決定し、その旨をファックスで張俊氏に伝えた。

会議では、徳欽の反対理由などいろいろな推測がなされた。ただ今年の登山が中止になれば、来年は隊をだせるかどうかは不明であることもあり、かなり切迫した場面にたたされた。

七月十八日、張俊氏から、急遽月末に調印団来日決定とのファックスが入った。合同登山の良好な環境を確立するための時間を要した、迷惑をかけたが理解してほしいとの文面であつた。二十日隊員会議を開き、いったんゆるんだ気分を引き締め、今年の梅里雪山をやることを再確認した。決して諦めずに待ちに待った一カ月半であつたが、やっと調印団来日にこぎつけることができた。

三、調印式

八月三日、調印団が来日。メンバーは以下の通りである。

副団長 李致新 (34) (中国登山協会副主席)
団長 葉明寿 (55) (雲南省体育運動委員会副主任)

張俊 (39) (同弁公室副主任)

楊學良 (39) (迪慶藏族自治州體育運動委員會主任)

此称 (48) (同自治區德欽県長)

一行はまず福岡入りし、五日に京都入り。六日打ち合わせ。七日に京大会館において議定書調印が行われた。

日中国旗をはさみ、それぞれの代表である高村奉樹会長と葉名寿団長が、日本語と中国語でかかれた議定書にサイン。それぞれが所信を表明した。葉先生は、きびしい自然の中で、困難に立ち向かう勇気をもつことは、国の如何を問わず必要である、地元の人の協力を感謝する、と述べられた。その後懇親会に移り、来賓として、在大阪中国領事館李領事、小谷京都商工会議所会頭、読売新聞大阪本社今総務などから挨拶を受けた。翌日の新聞には「蘇ったパイオニア精神」とあった。

四. 日程

約一・七トンの荷物は、八月六日に送り出された。あとの日程は、十一月一日日本隊出発、十日B・C、十二月十五日登頂予定、十二月末帰国の予定である。

備考：梅里雪山(六七四〇メートル)は、ミヤンマー国境に近く、中国雲南省とチベット自治区の省境に位置する山群の最高峰であり、秀麗な未踏峰である。AACKは一九八八年、一九八九年、一九九〇年と試登と偵察を重ねてきたが、一九九〇年の本隊が十七名の大量遭難を引き起こしたことは記憶に新しい。

(文責 平井一正)

活動報告

ウイルヘルム山に登る

原田道雄

今年の連休は、せっかく新井さんから玉山の誘いをいただいたのに、都合がつかずお断りしたのだったが、間際になって寺本正ちゃんからお誘いを受けて、ウイルヘルムに行くことになった。四月二十九日出発 五月六日帰国。しかも出発が二時三〇分、閑空。乗り換えなしのポートモレスビー直行便。誠に効率の良いスケジュールである。

ところで、私の場合山にゆくのはほとんど誰かの誘いがきっかけである。だから誘ってくれる人がいることはとても嬉しいことである。今回の新井さんや正ちゃんもそうだが、国内では坂本ゲドウさんが頑張ってくれている。酒井さんの誘いでキリマンジャロにも登れたし今回もチンボラツソの計画を本誌に寄せておられる。これはたいへん幸せなことである。

昔、京都を真夜中近くに発つ夜行に乗ると、早朝山の麓に着いたように、エアバスは朝八時ポートモレスビーに着く。ほとんどの乗客は乗り継いでオーストラリアにゆく日本人だが、我々山登り屋八名は小振りのジェット機に乗り換えた。ポートモレスビーの空港には日本のJ.Rの田舎駅ぐらゐの建物がある。第二次世界大戦で日本軍がポートモレスビーを目指したが果たせず、飢えとマラリヤで数千人の犠牲者を出したオーエンスタンレー山脈の西端を越えて飛ぶ。山脈をすれすれにか

すめてマウントハーゲン(標高一六五〇メートル)へ。湿気は多いが案外涼しくてほっとする。

ここからは小型バスで約四時間で再奥の村ケグルスグル(標高二四五〇メートル)。

滋賀県でも小一時間も車を走らせると廃村があると言ふのに、途中の住人の多さにはびっくりした。道路脇に座り込んで通り過ぎる車に手を振っている。ものすごい急傾斜の山の頂まで畑がある。二〇一〇年にはポートモレスビーも人口巨大都市になると言う予想もあるようだが、分かるような気がする。

五月一日

草の葉を編んだ壁をめぐらしたレストハウスから湖畔の山小屋までの登り。昼頃に着く。キリマンジャロと非常によく似た木々や植物が生えているが、ただ湿気が多いのが違いである(標高三四〇〇メートル)。

五月二日

一時過ぎに出発。

六時前に夜が明けるまではヘッドランプをつけて前の人の足ばかり見て登る。ツアーリーダーは、我々二人にジョセフと言う名のガイドをつけて先行させてくれた。ジョセフは大変気の利く男で的確に助け船を出してくれる。やっとこさ頂上の岩峰の下に達したが、正ちゃんは快調。何のためらいもなく岩登りを始めて七時二〇分に頂上着(標高四五〇八メートル)。なんと最年長がトップで頂上に立った。最後は岩登り風で結構しんどいのにほんまにようやる。今回は無理して持ってきたビデオを向けて何か一言といったら「ただ今六十四歳と何ヶ月」。この歳で登ったこともさり

ながら、登ろうと言いつづける精神には敬意を表すばかりである。

そして私の番、私はほっとした思いでいっぱいである。私は「Yさん登ったで！」と心の中でつぶやいた。昨年七月、私はYさんに胃ガンの手術をしてもらった。そして二ヶ月後Yさんも切った。退院後何人かの人達にガン体験記のようなものを書いて送った。それは、遅ればせながら得た予防の知識を伝えなかったのと、自分が罹るまでは解らなかった当事者の心境を知ってもらいたかったためである。以来私は、心身ともにどれだけ過去の自分が取り戻せるかひそかに努力してきたつもりであった。その意味で、ウイルヘルムは私にとってメモリアルな登山だったのである。私にはキリマンジャロとはまた違った感動があった。そして、これが少しでも土倉さん達の励みになれば良いなとも思った。

十五分ほど居てすぐに下る。後続は小一時間遅れているようだ。少し下ったところで大戦中のB29の残骸を見て一二時二〇分に帰着する。正ちゃんと呼んで乾杯。

五月三日

下りの途中で出会った猟師は弓矢で鳥をとっていた。これがパプアの実状である。何しろ九十九%裸足で歩いている国なのである。バスを待つ間近くを散歩してみるとセスナの滑走路がある。かなりの傾斜で降りるときは良いが離陸の時は気持ち悪からう。パプアニューギニアにはこうした滑走路がずいぶん数多くあるらしい。道路のない奥地に宣教するのに、最も効率的な交通だからである。ところで、ガイドは二日間で四〇キナ(約四

〇〇〇円)を貰うが、ジョセフはよく助けてくれたので正ちゃんから特別に一〇キナを貰った。この分は女房にやるのだと嬉しそうに打ち明けていた。いい男だった。

マウントハーゲンではハイランダーというホテルに泊まった。完全に塙の中にあつてガードマンに開け閉めしてもらつて出入りする。入り口もロビーも廊下も犬を連れたガードマンだらけ。悲しい現実である。

五月四日

飛行機で北側の海岸の町マダンにでる。来るときの機内のパンフレットで戦後五〇年の特集を見たが、マッカーサー軍が退路を断つため超低空で落下傘降下をしている写真が載っていたのがこのあたりである。

五月五日

延々と続くヤシ林の中のロッジに泊るが、売っている土産物はベニスケースである。午後からはシュノーケルをつけて珊瑚礁を泳いだ。色鮮やかな珊瑚礁もさりながら、目の前を逃げもせず泳ぎ回るトロピカルカラーの魚の群れに圧倒された。山も良いが海に潜る人たちの気持ちもわかる。

年寄りが寄つてきて、「子供の頃戦争があつた。私は日本語を知っている。イチ、ニー、サン、シー、・、・、もしもし、はいはい」。ここは日本から遠く離れた島だが、日本はまさしくこの地で戦争をしたのだつた。ラバウルは今パプアニューギニアに属しここから近い。

正ちゃんが大事な物を珊瑚礁に落として困った顔している。入れ歯である。遊泳中、シュノーケルのマウスピースを何度かくわえなおしているう

ちに、海中に落としたりらしい。現地人のインストラクターが探してくれたが珊瑚礁は色も形も迷彩そのものである。しかも数メートル先は驚くほど深い。あきらめ切れぬ表情の正ちゃんに同情しながらも打ち切らざるを得なかった。

私たちにとって今回の旅行は予想以上にうまくいった。本誌に寄せられた北村泰一さんの心配をよそに、同行の若い人が高山病で倒れているというのにトップで頂上に立った正ちゃん。手術後一年にみたぬ私もまた頂上に立てた。美しい珊瑚礁も泳いだ。皆も満足しビールを飲み干して南の島も暮れていった。だが正ちゃんは少し盛り上がりがない。と、そのとき正ちゃんがマネージャーに呼ばれた。何と何と。あの現地人のインストラクターが遂に見つけて届けてくれたという。それにしてもあの広く深い珊瑚礁から一体どのようにして。彼らの能力と熱意は我々の常識をはるかに越えていた。二人はお互い本当に嬉しそうな顔をして立っていた。そして、彼の名前もまたジョセフであつた。

北村泰一さんが心配するもう一人のYさんが梅里雪山に行く。私はウイルヘルムこそ登つたがその後体調はさえない。明らかに以前とは体力が違う。私の体験から、梅里隊のかたがたへYさんへの配慮をぜひお願いしたい。

パプアニューギニアの旅から帰つて土倉さんを見舞つた。少しこの旅の話もしたが、すでに聞くのがしんどそうだった。土倉さんの名前は昔から知っていたが、実際に話し合うようになったのはこの数年である。土倉さんには私と通じ合うところがあつた。そしてこの一年の闘病を通じて、さ

らに分かり合えるような気がしていた。ある種の仲間意識とでも言おうか。その土倉さんが亡くなられた。私には少なからずショックである。死んでからがたが言うのは土倉さんのもっとも嫌うところかもしれないが、偲ぶ会もしないようでは済まされない人であった。

ブータン、ミャンマー、

ラオス（一九九六年）

安田隆彦

ブータン

ブータンでは弊社（大日本土木）はすでに十年間仕事をしてきた。一九八六年―九二年、三〇キロワット前後の小水力発電所を十カ所、二〇〇キロワットを三カ所作った。大型発電所から長距離送電するよりも、村のそばの谷を小さくせき止めて電気を作った方が効率的だとのことで、ブータンの田舎で小型発電所を十三カ所も作った。ど田舎中のだ田舎、東端の現場から西端の現場まで、天気が良くて三日、悪いと五日もかかる僻地にてブータン人を仕込みながら一現場一人の社員でやりとげた。家畜とともに畑仕事しかしたことのない江戸時代の農村に突然電気をもたらしたが、村人にとっては魔法使いか神様かと思えたことであらう。

一九九一年からはバロ谷の農業開発をしている。ダシヨ―西岡の故郷である。ここで水路、橋、農道を作っている。これらも作ればすぐに毎年の

作柄に繋がるので、建設に当たっている人々には感謝感謝のまなざしが注がれている。今回私の現場訪問時には大臣が四人も謝意を表しにわざわざ来てくれた。

建築は今でも釘を使わない。木をほぞと溝で組み上げ、壁は粘土をつき固めて作る。建築とは土と木で作り上げるもの、築土構木、土木Ⅱ建築とゆう正しい建築方法を実行している。

ようやく始まったラジオ放送が二つの現地語一時間ずつ、英語が一時間のみ、静かな夜を満喫できた。日本の援助で衛星通信が始まったので電話はかけられるようになったが、パソコン通信に繋がらない。今は年間五千人ほど旅行者がはいっている。

ミャンマー

ビルマⅡミャンマーと言えばまず茶色っぽい袈裟を着たお坊さんを思い出すが、町中至る所で見かけるのではなく、銀座で和服姿を見かけるぐらいの頻度で見られる。

スーチーさんの家は緑に包まれた豪邸街の端で、田園調布よりも遥かにきれいな町並みの中で、日本で一番似ているのは軽井沢別荘街の旧軽地区である。人通りもほとんどなく、もちろん軍隊、警官のたぐいも全く見あたらない。自宅堀越しの集会は土、日の四時頃より行われ昼過ぎになると三々五々人が集まり始めるよう野外コンサート。の雰囲気が一番当たっているとのこと。

町全体を見渡しても軍隊の姿は全くない。エジプトあたりの物々しい様子になれている目からすると信じられない。霞ヶ関にはいつも機動隊が待機しているし大使館の近くにはポリスがたっている

東京と比べるとよほど平和な安定した都市である。

先日来のスーチー騒動で在住の日本人には日本の報道陣から問い合わせがよく来るとのこと。その度に安定した様子を返事すると、それでは困る何かもつと変わったことをと根掘り葉掘り聞かれる。報道陣は読者の好きそうなことを集めなければならぬので大変である。日本の報道陣は米国の意志に従って人権外交をベースにしなくてはならないのでスーチーファンである。リークワンユーがミャンマーの軍事政権をサポートしたような発言が出せなくて残念。考えて見ればインドネシアだって軍事政権から次第に安定した国になってきた。未開発国からいきなり人権を重んじる米社会並になると思う方に無理があると思う。

ゴルフ場が町の近くにたくさんあり多くの人が楽しんでる。その内二つは軍事政府高官が主として使っている。ヤンゴンGCは、明治三十九年からの歴代チャンピオンのボードが掲げてあった。ちなみに日本で一番ふるい神戸GCは、この三年前にオープンしたところである。

町並みはほとんどが平屋、中心部では四階建てぐらいの日本で見える田舎町である。それにも関わらず、町中を広い歩道付きの四車線道路が至る所走っている。

東南アジア最後のフロンティアのベトナムとミャンマー。両方で仕事をしている人によると、ミャンマー人との仕事の方が遥かにスムーズに行くとのこと、同じ仏教国として性格が似ているのかもしれない。半世紀ぐらいかけてゆつくりと成長して欲しいと思う。

一九八七年に長い戦火の末ようやく革命側が平定し、安定してきたところで徐々に開放政策を取り始めたばかり、一般には行きにくい。我々のミッションは国賓待遇。バンコックから一時間で飛んだ飛行機のそばに出迎える車が横づけ、そのまま町へ。

空港からホテルまで十分、信号は二つだけ一〇〇CCのバイクに乗ったおまわりさんが笛を鳴らしながら白手袋の手を振って（パトカーのサイレンの替わり）われわれの車列を先導すると、道行くすべての車、自転車が一瞬停止して道をさっと開けてくれる。一党独裁政権の良い部分があるに違いない。鬱蒼とした木立に見え隠れする沿道の町並み、いや村並みはほとんどが平屋か二階建。戦争の始まる前に着工し、戦火の中苦難の未完成したナムダムダム、そこからの電力をタイに売電し外貨を稼いでいる。そのほかに売れる物は木材と鉱物資源。

人口四二〇万人が本州と同じ面積に暮らしている。北半分は高地で焼き畑農業、南は水田。先ずはメコン川の支流を利用して電力立国を目指している。ダムサイト適地は四〇カ所もある。国作りをスタートしたばかりで自由主義国家を見たらびっくり仰天、追いつくには電力だけでなく、あれもやらねば、これもやりたいで、茫然自失。日本サイドはあれもできる、これもやったら、そして一番大切なやらうちと手を組んでとお手手があちらからもこちらからも差し出され素朴な人々を汚染しそうだ。誰か強いリーダーが整理すると良いのだが、それをすると叱られるので自由経済

ではしかなかった。

招かれた大使公邸庭先より初めてメコンの流れを見る。茶褐色の液体が下から盛り上がるように流れてゆき力強さを感じる。ベトナムの河口まで二〇〇キロメートルあり、その間の落差は一六〇メートルしかないのに、かなり淀んだ河かと想像したが極めて躍動感がある。国の若さを表しているのか小さいパゴダが少しあるだけで観光する物は何もない。郷土料理はいけるが感激する程でもない。言いたくないが鑑賞に値するひとはお目にかかれなかった。しかし人柄は良さそうだ。全国どこを歩いても不安な所はない。目と目が合うとニコっとするのは町行く人だけではなく、政府高官が説明をしてくれている時もなくなく微笑みかけてくるような顔付きで温か味と親しさを感ずる。二〇年後が楽しみだ。

（筆者からは昆明訪問記も寄せられたが、紙数の関係で割愛した―平井）

書評

文：中島暢太郎、写真：近藤裕史著

「パタゴニア氷河紀行」

福島義宏

中島さんが、始めてパタゴニアに出かけたのは一九六八年、探検部遠征隊の隊長としてである。その次は、一九八三、八五年に、学術遠征隊隊長として、今度は若手研究者を率い、その後も、

一九九二年に京都地学巡検団団長として行かれている。災害気候学の教授として、京都大学防災研究所に就任以来、パタゴニアに始まり、そしてパタゴニアで全うされた。肩書きを外した後も旅は続いており、なんと幸せな教授人生ではないかと思われるかも知れない。しかし片方では、山岳部長当時、大学紛争後の学生の世話や何回か続いた遭難の家族ケア、また登山隊の募金集めを淡々と当たっておられる姿を覚えている。一方の近藤君（クリマン）は工学部に入るも、雪氷気象学分野を変え、登山隊や学術遠征隊に参加し、今は梅里雪山に眠る中島先生の弟子である。

大学山岳部に属していて、気象・雪氷の研究分野に属した、北大、名大、京大などの若手の学生達が「比較氷河研究会」を結成し、自弁でネパールや中国天山に出かけていたのは一九八〇年まで、ようやく海外学術調査旅費が割り当てられるようになった時点には、南極、ネパール、パタゴニアへと会員は多忙を極めていた。丁度、私は樋口敬二さんのネパール氷河調査班として、ランタン谷でモンスーンを体験したのは、氷河水文の専門家が南極や中島班に引き抜かれていて、ネパール班が手薄になっていたからに他ならない。回り回って、私が現在の職場に居るのも、ひょんなことにネパールプロジェクトに加わったこと、それも中島さんのパタゴニア調査隊が優秀な研究者をネパールよりも先に確保したことが関係している。

さて、「パタゴニア氷河紀行」は、気象学者としてだけでなく、ダーウィンの航海記を読み、蝶の採集に傾倒してきた、あるいはチリ―在住の

追悼

わが友土倉九三君を偲ぶ

川喜田二郎

土倉君が死んだ。その存在感を無類に發揮した、全く得意な個性が、我々の仲間から消えた。よく人を愛し、また憎んだ彼がいなくなった山仲間の間に、好き嫌いを超えて何ともいえない寂寥感が訪れたのではないか。

彼は小学校一年生からの私の友である。京都一中では山岳部仲間であり、よく北山や美濃を歩いた。しかし進学コースは異なっても、仲間であることに変わりはなかった。そうして、京一中・三高を通じての山仲間のご縁が、大先輩今西錦司さんを領袖とする大興安嶺探検へと結集していったのである。

普通なら学園のコースが異なれば、ご縁はそれまでとなる。ところが、戦時という異常事態が、これまたその後尾を引く異常な歴史を生み出したのである。大興安嶺探検を共にしたのは、今西親分を囲む「不逞の輩」の旗揚げみたいな者で、今西・土倉のコンビなども、この「ご縁」が生みおとしたものである。その縁起の中味を見ると、次のようなことがある。

まづ土倉君は、祖父の時代には大和の土倉家といえど一世をゆるがす大富豪だった。ここに彼の無類の誇り高い魂と万事につけての趣味・センスの正統派的姿勢があり、期せずして今西さんのそれと波長があう面がある。

しかも彼のさまざまな逆境の反面から、彼はまた民衆派・人情派であり、普通人の信義を自覚的に重んずる、民主的・生活者の人間になっていったのである。ハツタリ嫌いでもしろ臆病である。ゴマ化し・ゴマスリは大きらい。その反面、飾らないハートナイスさを非常に愛した。

普通人たろうとする彼の良さが發揮されたのが、数十年の永きにわたる彼の本業、つまり印刷業の安定した経営である。もちろんそれに伴っての社会的信用である。この基盤があつたればこそ、彼の特別な活動であつた。

まず彼は、裸の人間として、異常なほどの感受性と人情を持っていた。人の心の深層に迫ることもできた。多読でもあつたから、文学的センスも豊である。その上、他人とのつきあいが無類に広い。さらにそれらの生活雑情報をまとめてイメージ化するセンスに長けていた。だから彼の陰のあだ名は「情報局総裁」だった。

このような能力こそ、海外の登山隊・探検隊が、まずもって立ち上がり、最も必要とするものである。そこへもつてきて、かれのハートナイスさと骨身惜しまぬ出没自在の活動力。こうしてAACKは毎度毎度だけ彼の世話になつたか判らない。

さらに加えて、彼のまとめる能力は、情報をまとめるに留まらず、人脈をまとめる上でも隠然たる力を持つていた。ただしその反面、あまりにも激しい好き嫌いのため、反撥を買った向きもすくなくなつたろう。

今はそのすべてを超えて、この特異な友を喪つたことを、淋しく偲ぶのみである。

様々な階層の人々との交流を通して、築き上げてきた、中島さんの博識で配慮の行き届いた人柄がいたる個所に認めることができる。本文では探検部遠征隊に、隊長として引き受けた経緯から二回の学術調査の知見が要領よく記されている。パタゴニア氷河の太平洋側には降水が多く、その流動が早いこと、それに比べて大西洋側は降水量が少なくなるなど、当然ではあるが、読んでみて納得できる。一方、アマチュアの域を出る写真家、近藤君は氷河や山と雲のショットを単なる風景としてではなく、光の織り成す自然の造形として私たちに示してくれる。私には無音の世界にいるような静寂感に溢れた表現で、心が洗われる。若くして逝つた近藤クリマン君の次の作品を是非とも見せてもらいたかった。

一〇三ページ、写真多数、

二九六七頁

(株) リプロボート

(電話) 〇三三九八三六一九二

初版 一九九一年

AACK人物抄

高橋健治さん

—その2—

斎藤清明

高橋健治さんには、『最新のスキー術』（一九三四年、三省堂）や『スキーテクニク』（一九三五、同）といったスキー教則本がある。オーストリアからアールベルグ・スキー術を日本に初めて紹介したというから当然のことだろう。日本山岳会の『山岳』や、雑誌『山』などに依頼された、山とスキーに関する文章もある。これらのことは、細野重雄「高橋健治さんの山」（『岳人』）や香山時彦「私の会った人」（『朝日新聞』）などで知り、AACK国際登山探検文献センターの図書目録で確認した。

細野さん（一九五八年没）は三高山岳部で高橋さんの少し後輩だが、京大農学部卒は高橋さんと同年の仲間だった。高橋さんの逝去（一九四七年十二月二十七日）間もない一九四八年の『岳人』第八号（当時は京都岳人社の発行）に寄稿したものである。「高橋さんは友達はもちろん、ちよつとした知人に頼まれても何でも応じる性質であった。自分の企図する山行を止めても、後輩のために岩登りやスキーのコーチに出かけ、知人に頼まれると何処へでもスキーの講習に出向かれたし、

スキー術の著書まで引き受けたのであった。友達を利用するどころか、却って利用されるばかりであったといつてもよい」と、人柄をしのんでいる。また、その高橋健治登山歴に「一九三二年十二月、蕨平にて三高山岳部員に対し、アールベルグスキー術講習する（奥氏とともに）」「一九三三年十月、穂高で三高山岳部員の為、岩登術講習なす」「同十二月・一月、乗鞍冷泉小屋及び細野で関西岳聯の為アールベルグスキー術講習をなす」と記している。

香山さん（元和歌山大学長、故人）は、京都三時代からスキーをやり、三高山岳部員ではなかったが毎冬、白馬山麓・蕨平のスキー合宿に出かけていた。「そこでは、高橋さんは、まるでスキーの神様であった」と記している。植物学教室の大学院生だった高橋さんにあこがれたのも一因で、三高文科から京大理学部植物学科に進学。隣の研究室にいた高橋さんからいつそう親しくスキーの指導をうけるようになる。

この蕨平スキー場が、三高山岳部がスキー合宿を行うようになったことで開拓されたことは、梅棹忠夫さんの「信州蕨平」（『梅棹忠夫著作集』第十六巻）に記されている。梅棹さんも、ここで三高二年目の合宿で高橋さんから直接に指導を受けている。シユテム・クリスチャニアを個人教授によつてこなせるようになったそうだ。

ところで、アールベルグが導入されるまでの三・高・京大の山スキーは、インナーリールと称する内脚体重回転が主流だった。例えば、『三高山岳部報告』第七号第五冊別冊（一九三〇年二月）には、今西錦司さんの「一九三〇 スキーシステム

講話」があり、その中でインナーリールが紹介されている（この文章は、たんにスキー技術を説くだけでなく、ビッグクライムすなわちヒマラヤをめざす冬山登山者であれと楛を飛ばしているのだが）。実は、インナーリール術は今西さんの創案だといわれる。内足の体重で内傾しながら回転する、今日でいえば不思議なスキー術だった（一九八〇年三月、岐阜県・石徹白で今西さん自ら、このスキー術を披露されたが、しんどいスキー術だというのが小生らの本音だった）。登山で深い雪の中、重いザックを背負つて安全に下るために考えたそうだが、習得は難しかったようだ。

高橋さんのアールベルグは、インナーリールとは対照的に、徹底的な内脚体重回転である。このほうがずつと習得しやすい。こちらが、主流になるのは、当然のことだった。しかも、高橋さんは留学して最初のスキー・シーズンに、アールベルクの教祖シユナイダーに学んでいる。そして、その報告の手紙を一九三一年三月、グリーンデルワルトから三高山岳部に送っている（『三高山岳部報告』第九号第一冊「アールベルグシユニールを学んで」）。なお、これを読んだ今西さんは直ちに「アールベルグ派批判」を執筆し、同じ号に掲載された。

このように高橋さんは、本場アルプスで新しい動きを学んだり、ガイドレス登山を行うとともに、その体験を京都に報告していた。「欧州の山は私にはただ経験として技術の道場にすぎない。やがて練りきたえた道場での精神内容をヒマラヤのフィールドの中に実験する時の一刻も早く来たらんとを待ちつつ」と、AACKのヒマラヤ遠征を視野にいれながら。（続く）

私の体験

一酸化炭素中毒事件

阪本公一

やや旧聞になるが、一九六四年十二月末、会員阪本、能田、永田とJAC佐藤典子さんが、大日岳にスキーの帰り、岐阜県郷ヶ野高原で張っていた四人用テントの中で、一酸化炭素中毒を起こした。この事件は、今後の会員の山行に参考になると思われるので紹介する。

事件はEPIガスランプのもとで夕食をしているときに起こった。まず阪本が急に眠たくなり、横になってうつらうつらし始める。テントの奥に座っていた佐藤さんも、このころ横になり出した。

阪本は半分寝ながら能田、永田の話の聞いているうちに、非常に胸が苦しくなり、外へ出ようとするが出口がわからない。この時点で目はほとんど見えず、足腰も立たない状態であった。テントに入って四〇―五〇分位か。ようやく外へ出て、仰向けになって口をバクバク開いているとだんだんと意識が戻ってきた。そうこうするうちに、佐藤さんのゴロゴロと喉の鳴るようないびきが聞こえ出した。あとのふたりはまだ元氣。「佐藤さんがおかしい。みてあげてんか」と阪本。「佐藤さんは寝てはるのや。大丈夫やで」と能田。阪本は必死に「佐藤さんが危ない、テントから引っぱり出して」と叫ぶ。能田、永田が佐藤さんをテントの外に引っ張り出す。永田は手首をもって脈を見た

が、脈がはつきりしないという。能田が佐藤さんの眼をみる。「瞳孔が開いているわ。ナマコ君、人口呼吸」。能田はマウス対マウス人工呼吸をはじめ。永田はこれに合わせるように、佐藤さんの胸をおさえて心肺蘇生マッサージを行う。阪本は足腰がふらつき、テントの横でポケットとして二人の動きを眺めたまま。十五―二十分、または三〇分くらいかかったか、突然佐藤さんの喉がなり、食物を嘔吐。「喉に物が詰まったらあかんから顔を横にして」と能田。やがて佐藤さんが「フウ」と息を吐出した。三人でなんども佐藤さんと呼ぶ。「私どうしてたの」、佐藤さんの第一声。もう大丈夫と三人ともほっとする。テントを開け放し、それから二時間四人でしゃべり続け、ようやく佐藤さんが自分で立つて歩けるようになるまでに回復した。本当に危ないところであった。この事件の原因として次のようなことが考えられる。

一・EPIガスランプを明りとして使用したこと。ガスランプの芯を新しいのに変えたが、なぜか炎を調整できず、赤味かかった薄暗いままでテントの中で使用した。

二・テントは夏山用のフライにさらに冬用のフライを使用したので通気性が悪くなったものと推定される。(なお当時雨も雪も降っていなかった)

三・ローソクの場合は酸素不足になると自然にローソクが消えるので、EPIランプも同じ様な気持ちで使っていた。EPIガスランプは薄暗かったが、ずっとついていた。

四・EPIガスランプの使用説明書には「屋外で使用のこと」との注意書きが明記してあり、もともとテントの中で長時間使うこと自体危険性が

あるとのことだが、その認識が全く無かった。気づくのが早かったこと、適切な人工呼吸と心肺蘇生処置が効をそうしたことにより最悪のケースを免れた。なお同様な一酸化炭素中毒で大山で2人の登山者が死亡している。(日本山岳会京都支部会報No.39(95.6.15)からの抜粋)

日本登山の研究を 考える

ウィーン大学日本学研究所
研究助手
Wolfram Manzenreiter

(著者は一九九五年七月から、国際交流基金から一年間のフェローシップを得て、日本の登山界を社会科学的な視点から調査のために来日した。京大人文研で仕事をしていた関係で、AACCK登山探検文献センターにもよく出入りし、AACCKにも知人が多い。帰国前の忙しい中をニュースレターに寄稿をお願いした所、快く引き受けてくれたのがこの文である。原文日本語)

一・はじめに

平井先生から「ニュースレターのために何かを書いてくれないか」と頼まれて、「OK、何でもいから何か書こう」と考えた。しかし特に面白い話題がなかなか気がつかず、そのうちにオース

トリアに帰る出発日があまりにも早く近づいてきた。読者は日本人の登山家だから、オーストリアの登山の方が面白いのではないかと考えた。しかしそんないい思いつきかどうか疑念がわいてきた。例えば現在日本登山界の代表的な現象としては、中年登山ブームが目立っている。オーストリアの中青年はどうか、と考えたら、向こうはビールいっぱいやしつこい食事が好きなので、太鼓腹を運ばないといけないような人が多くて、中年登山ブームの可能性は、あまりないのではないか。ただしそれだけでは生半可な事実をこえないし、品のない冗談として誤解されている恐れもあるし、そのかわり、若者のことを書いた方がいいのではないかと考えた。

日本の若者の登山離れに対して、オーストリアではどうか。やっぱり登山はおしゃれのスポーツではない。しかし継承者の問題はない。オーストリアやドイツやスイスと同じように、まれな例外を除いて、全国的なひとつの山岳組織しかない。オーストリアの場合には、少しの追加料だけで家庭加入を受けられる。だから若者が好きであろうと嫌いであろうと、いずれにせよ加入している。比べにくいから、この話題もやめた方がいい。

次にオーストリアの海外登山歴？登山関係スポーツ産業の衰退？全国山岳会の歴史？どちらにしても興味深い論文になるうが、専門家ではないので、詳しい説明ができない。そこで最後に、日本登山、社会科学と私自身の関係を話題にしたい。

二、なぜ日本の登山は西洋の日本学者にとって面白いのか

私は日本の登山界を社会科学的な視点から調べ

に来日した。高村会長や吹田啓一郎先生のおかげでAACKの登山探検文献センターを利用できた。心から感謝したい。この援助がなかったら、私の研究は実現できなかったであろう。この一年間何を調べたか、どうして会員をインタビューしたかをこれから説明したい。

なぜ日本の登山は西洋の日本学者にとっておもしろいか。簡単な質問だけど答えにくい。經典的なジャバノロジーは昔から大体日本の古典文化とその美術や歴史などに取り組んでいるが、現在日本社会に住んでいる人たち、その集団や組織、配分や構造、価値や基準、夢や失望、強制や可能、行動などはもつと面白いと思う。数学や心理学と違って、ジャバノロジーの内容、研究法、理論、目的はそんなに直接に定義できない。でも日本の文化を分析して、それが理解されるようになれば、現在日本社会だけではなくて、日本人のスポーツ活動の研究でも有意義になる。残念ながら、特に日本でスポーツや社会科学の関係はまだ徹底的に体制化されていない。登山社会の分析は、科学的論文はあまりなくて、問題意識は軽視されている。したがって研究を基本とする資料がなく、以前だれもあまり踏まなかつた地域に入るような旅にでるのとおなじような感情である。それをバイオニアワークといったら言い過ぎるかもしれないが、もつと相応しい言葉はないのではないか。

三、登山というサブ・カルチャー

登山は文化とよく言われるが、その場合は登山者が持っている文化の理解と歴史家の文化の定義がちよつとちがう。登山がサブ・カルチャーとして見えるとは私の意見である。登山は思想として

も、行為としても、先見的に存在していなくて、その思想を発想する人間も、その活動を実現する人間も必然の前提である。人間が登山を自然のままで分らないから、だいたい長い間の訓練やしつけを要する。一人だけでなく、多くの人間が同じ決意で自由にその活動に参加したいのを選んでいく。この活動者が登山界というサブ・カルチャーの中心を成立している勢力になっている。彼らの言葉や経験、道具や印刷物、ブレイグラウンドなどは登山というサブ・カルチャーを他のそれと一線を画することに役立つ。それだけでなく、グレーディング、ピッケル、ピレ、三つ峠というものの意味をちゃんと理解することによって、サブ・カルチャーへのメンバーシップが暗示されているし、メンバーが自分のアイデンティティを積極的に発表することができる。例えば、ピトンやユマールの意味はメンバー以外誰にも分からないだろう。中村君のフレンドズとスミスさんのフレンドズがそれぞれがどう違うかも知らない。言葉の適当な利用だけではなくて、その言葉のうしろの実体的なものの適当な使い方によって、サブ・カルチャーの階級的組織体系のなかの位置が決まっている。

四、サブ・カルチャーに属するもの

登山というサブ・カルチャーに所属しているのは登山者に限らない。例えば、登山関係の雑誌、本などを出版しているメディアは登山者のまわりの周辺行為者のひとつである。またスポーツ用品産業、山地観光客用宿泊や専門旅行会社などが、登山の成立、あり方、再編成に参加している。スポーツ行政、山岳連盟、地域の観光行政や山岳警

備隊なども関係している。打ち込みボルトの発見、ダブル・アックスの水壁技術、富山県と群馬県の登山条例、文部省の高校登山規制、日本山岳協会や日本勤労者山岳連盟の組織化など、いずれも日本登山界の発展を刻印したのは確かだろう。それぞの意思や関心があまり同じでなくても、その競争が登山の主要な推進力になっている。

五. 日本の登山界の特殊性

登山はサブカルチャーと言われていたから、上位の日本社会の環境に関連している。以上に述べたことは、どの国の登山界の成立でも同じようなフレームワークが有効である。日本登山界が特殊な性質をもっている理由は、登山界が日本社会の一般的構造、処理を引き継いでいるからである。集団主義、忠誠、先輩と後輩の上下人間関係などの組織原則は山岳集団にもよく見える。もっと具体的なレベルでも類似していることは多い。例えば年間の時間意識である。四月ごろ山岳雑誌に山岳会の入会募集広告、同時に大手企業が新社員を雇用し出して、会計年度も学年もはじまっている。遭難事故がゴールデンウィークやお正月に増えているが、社員である登山者が長い休暇をとる機会が、そのときしかないからである。中高年の登山ブームを社会の高齢化との関連はいうまでもないが、それに比べて、サービス産業の増加と山岳会に入らない登山者の増加の関係は、ちよつとわかりにくい。でも二〇年間を振り返って、その間の私的な登山学校、登山旅行会社、募集遠征などのいろいろな傾向を分析したらよく分かんと思う。

六. おわりに

以上簡単にプロジェクトの基本的な思想を、二、

三つ紹介した。登山がこの五〇年間でどのように変動したかを調べるのに、登山者自身にきくのは最も直接的な方法であろう。しかし適当な人選と主観の問題がある。次に商業的な山岳雑誌を調べる、の方法をとった。登山者の間にひろく普及している雑誌は、活発的な登山者とサービス産業などを仲介して、登山関係の討論会の役割を果たしている。「岳人」「山と渓谷」などはひっきりなしに戦後登山史を記録してきた。「岩と雪」では登山者が記者と読者を兼用し、興味深い雑誌であったが、平成七年に廃刊になってしまった。その他の主観的資料として、日本山岳会の「山岳」「AACK時報」「京都大学山岳部報告」なども分析した。AACK文献センター、京大図書館、日本山岳会の図書館に何ヶ月をすこして、やっと完成した。

仕事はきつなくても面白かった。AACKの会員の紹介がきっかけで、だんだんひろいネットワークができあがった。文部省の立山登山研修所、富山県や長野県の県立登山関係事務局、日本勤労者山岳連盟、日本山岳協会など、たくさんの資料を送ってもらって、たいへんお世話になった。文書の分析だけでは足りないと思つたから、できるだけ担当者との直接的な話し、観察、インタビューなどを加えた。そのほか、山岳連盟組織の代表者、雑誌の編集者、専門旅行会社の代表者などに会える機会があった。その情報や基本分析を合わせて、日本登山界の実態がぼつぼつ見えるようになって、発達の過程や変動への動力とその責任者などがはっきりした。結果を発表するのはまだ早い、機会があればそれをその後のニュースレターに書くと思う。最後に高村会長はじめ、この一年間ご協

力をいただき、お世話になった方々に感謝したい。
(Institut fuer Japanologie, Uni. Wien,
Universitaetstr.7, A-1010 Wien, Austria)

言いたい放題

登山は 競技なりや

竹内道雄

文芸春秋八月号のグラビアに「丹沢のボツカ駅伝」の写真が掲載されている。説明文によれば、「神奈川県丹沢の通称バカ尾根を鍋割山頂まで標高差九三八メートルを五人一組でタイムレースで競う。背には四〇キロまたは二〇キロの石コロを詰めたザツクを担ぎ、普通に登山したら三時間半はかかる山道を速いチームは約一時間半で駆け登る。当然、まわりの風景を楽しむひまも余裕も選手たちにはない」との解説がそえられている。

実はこのようなことが突然起こつた訳ではなく、国体の高校生の「登山競技」では、各県の代表高校チームをタイムレースで競わせ、順位をつけ表彰しているのである。ウンだと思つたら、国体開催期間中の朝日新聞の朝刊スポーツ欄を気をつけて見ていれば、高校名と順位が小さく掲載されているのが発見できるはずである。

国体の登山競技の歴史は古く、私の高校時代、東京都においては都岳連のオエラ方の指名により代表が決められていた。このような選出方法では、不明瞭であるとして、いつからか各県の予選にタイムレースが採用され、いつからか国体においても、タイムにより順位が決められることになったのであろう。

「登山」の本質が、勝敗やタイムを競ういわゆる「競技」と明らかに異なる文化の香の高いスポーツであることは、今更いうまでもないことであり、タイムを競うことは「安全第一を心がけ、遭難は絶対起こすべからず」とする大原則に反する極めて危険なことである。

国体から「登山」がはずされなかったための便宜的な方策であるということかもしれないが、純粹に登山を愛好する高校生を「安全よりタイムが第一」であるとミスリードする危険性があることを、登山の指導者たちは認識すべきであり、イージーな妥協はゆるぎないものと考える次第である。

本年五月一日から八月三十一日までの一二三日間で、日本百名山を踏破すべく重広恒夫氏が挑んでおり、注目を浴びている。その理由として「山登りというのは非常にわかりにくい部分がある。・・・他のスポーツだと時間や点数が結果となつてわかりやすい。・・・仮に今回成功したら、この記録を破ろうとする人がでてくるでしょう。他のスポーツの記録と同じようにです」と重広氏は述べている。

国内はもちろんのこと海外でも未踏峰がほとんどなくなつてしまった現在、重広氏のみならず、タイムレースに血道をあげて、「エベレストのサ

ウスコルルートは何日間で征服した。これが世界記録だ。」「〇〇の岩壁を何時間で征服した。ギネスブックに掲載してほしい」などと主張して、海外の良識ある登山者の矚目をくよような単細胞登山者がでないように願うのみである。

昨今我が国登山界の顕著な現象といえは、「中高年登山者の激増」を第一に挙げることができ。日本山岳会の会報をみても新入会員のほとんどは中高年層であり、若者はきわめてすくない。AACKも若手会員の供給源である山岳部の新入部員が毎年一名とか二名に減少しているとのことであり、会員の高齢化はもはや避けがたいことのものである。

なぜ大学生にとつて山岳部が魅力がないのかという理由は種々あると思われるが、ひとつには大学生が裕福になり、仲間同志で自由に海外に行けることや、国内の山岳団体から毎年多くの海外登山チームがでてゆいたため、残念ながらAACKの活動が目立たなくなつてしまつたということなどが挙げられよう。

AACKは戦後、外貨規制の厳しい中、外国政府からの登山許可の取得、社団法人化など、今西錦司氏や西堀栄三郎氏など、諸先輩の卓越した知恵と指導力により、輝かしい実績を挙げ、その名を内外に知らしめた。しかしながら、現在では、外貨の規制や渡航制限が撤廃されたため、海外登山が激増し、また企業も海外登山よりも地球環境問題などに関心をもちといった状況であり、従来パターンへの募金に頼つて海外登山遠征隊を出すことが、困難になりつつあるようである。

六五〇万円だせば、国際登山隊の一員としてエ

ベレストにでも登頂できるご時世であるから、ヒマとカネのある仲間が集まつて遠征チームを組み、世界各地の高峰に気軽にいかけて行くといった方向に進んでゆくのではないかと考えている。この場合は、いきおひ中高年のメンバーが多くなること、必ずしも医師が動向しないケースもあるから、現在以上に安全性を第一に考えなければならぬことは言うまでもないことである。

編集後記

当初年二回の発行と考えていたが、会員間の情報交換には、年四回の発行が必要との希望が多く、できるだけするようにしていきたいと思つて、本号をお届けする。原稿が集まらなかつたら、その号は発行しないことにする。しかしできるだけ続けたいので、会員諸兄弟の寄稿をお願いする。特に若い人の寄稿と建設的な提案を期待する。

遭難以来六年いよいよ梅里雪山計画が実現の運びになつた。今度こそ無事成功を切に祈る。前号では、表題に学士山学会とミスして申し訳ありませんでした。決してわざとしたわけではありません。次号は十一月末発行の予定。(平井記)

編集委員 平井一正、酒井敏明、薬師義美

発行日 一九九六年八月三十一日

発行所 京都大学学芸部山岳会

京都市左京区北白川追分町

京都大学農学部若坪五郎気付

京都市北区小山西花池町一一八

製作

(株) 土倉事務所